

参加型サイクルスポーツイベントにおける 参加動機、満足と将来意向の関係性 -瀬戸内海でのロングライドイベントを事例として-

スポーツクラブマネジメントコース

5012A322-3

湊 岳

研究指導教員: 間野義之教授

1. 緒言:

スポーツツーリズムは、世界的に成長著しい産業の一つであり、Gibson (1998)は、スポーツツーリズムを「スポーツに参加したり、スポーツを観戦したり、スポーツに関連する施設を訪問するために、一時的に日常生活圏外に出る、レジャーをベースとした旅行」と定義している。この定義に基づきGibson(1998)は、スポーツツーリストを以下の3つのカテゴリーに分類している: (1) スポーツ観戦者 (2) スポーツ関連施設訪問者 (3) スポーツ参加者(アクティブスポーツツーリスト)。多くの旅行目的地では、新規顧客を獲得するよりも容易でコストもかからないという理由から、リピート顧客を維持しようとしている(Petrick et al., 2001)。スポーツ観戦やスポーツ施設訪問が目的のスポーツツーリストと異なり、参加型のアクティブスポーツツーリストは、スポーツイベントへ参加した結果によって旅行目的地への再訪を意思決定しており、非常に多くの変数がその決定に影響している(Gibson, 1998)。

本研究は、日本のアマチュアサイクルスポーツ愛好者を対象としている。日本におけるサイクルスポーツ市場は近年急速に拡大しているが、サイクルスポーツ愛好者の心理行動的な特徴や彼らの意思決定に影響する要因が何かはほとんど研究されていない。サイクルスポーツイベントは、工藤、野川(2002)の言う「自然観光資源そのものを舞台として実施されるスポーツイベント」であり、その発展が地域活性化に果たす役割も大きい。従って、日本におけるアマチュアサイクルスポーツイベントの参加者の参加動機と満足、再訪意向の関係を明らかにすることができれば、アマチュアサイクルスポーツイベントを通じた地域活性化、スポーツ人口の拡大に寄与することが期待され、学術的および実践的な意義がある。

2. 方法:

本研究のデータ収集は、2012年11月11日に広島県呉市で開催された「第3回芸灘とびしま海道オレンジライド2012」において実施された。同イベントは、広島県呉市から愛媛県今治市にまたがる7つの島を自転車で巡るロングライドイベントである。コースは、110kmのフルコースと58kmのハーフコースの2つのコースが設定された。参加したコースを走り終えた参加者に対し、大会本部内で調査票を手渡し、訪問留置法による回答者自記式質問紙調査を実施した。

調査項目は、人口統計学的変数、とびしま街道への事前認知に関する項目、参加動機に関する項目、満足に関する項目、将来意向に関する項目、イベントへの参加形態に関する項目、日頃の自転車習熟度に関する項目を設定した。

分析には、IBM SPSS Statistics 20 および IBM SPSS Amos 20 を使用し、有意確率 5%未満を判断基準として、以下の分析を行った。

(1) 確認的因子分析

「参加動機」「満足」について、先行研究に基づく調査項目の妥当性を検証するため、確認的因子分析を行った。

(2) 「将来意向」の尺度構造の確認

「将来意向」について、その尺度構造を確認するためにパス解析を行った。

(3) 共分散構造分析

確認的因子分析の結果をもとに、「参加動機」の各因子および「将来意向」を潜在変数、それぞれの下位尺度を観測変数とするモデルを作成し、「参加動機」の各因子が「将来意向」に及ぼす影響を検証するために共分散構造分析を行った。同様に、「満足」の各因子が「将来意向」に及ぼす影響を検証するために共分散構造分析を行った。

モデルの適合度は、GFI(基準値 $\geq .900$)、CFI(基準値 $\geq .900$)、RMSEA(基準値 $< .100$)を指標に判断した。

3. 結果

調査票の回収数は589件(72.4%)であった。回収した589件のうち、分析に必要な項目に欠損なく回答した361件を分析対象とした。

分析対象者の性別は、男性が91%、女性が9%、平均年齢は40.3歳で、30歳代(34%)が最も多く、40歳代(34%)と合わせると68%を占めた。地域別では中国地方からの参加者が75%と最も多く、広島県からの参加者が全体の62%を占めた。参加コースでは、75%が110kmのフルコースに参加しており、参加回数別では初参加が61%、2回目が24%、3回目が15%であった。

「参加動機」の確認的因子分析の結果、Alexandrix et al(2009)の先行研究と同様の7因子構造となることが確認された($\chi^2=298.00$, $df=97$, $p<.001$, GFI=.915, CFI=.934, RMSEA=.076)。「満足」の確認的因子分析の結果、Hallmann et al(2012)の先行研究に基づく5因子構造となることが確認された($\chi^2=92.61$, $df=34$, $p<.001$, GFI=.957, CFI=.963, RMSEA=.069)。「将来意向」のパス解析の結果、5つの尺度の妥当性が確認された($\chi^2=10.37$, $df=4$, $p<.05$, GFI=.989, CFI=.993, RMSEA=.067)。

「参加動機」の7因子から「将来意向」にパスを引いた共分散構造分析の結果は、7因子のうち「地域満喫」が「将来意向」に対して中程度の正の有意なパスを示した($\chi^2=471.43$, $df=184$, $p<.001$, GFI=.897, CFI=.932, RMSEA=.066)。

「満足」の5因子から「将来意向」にパスを引いた共分散構造分析の結果は、5因子のうち「サポート」が「将来意向」に対して中程度の正の有意なパスを示した($\chi^2=205.51$, $df=90$, $p<.001$, GFI=.935, CFI=.959, RMSEA=.060)。

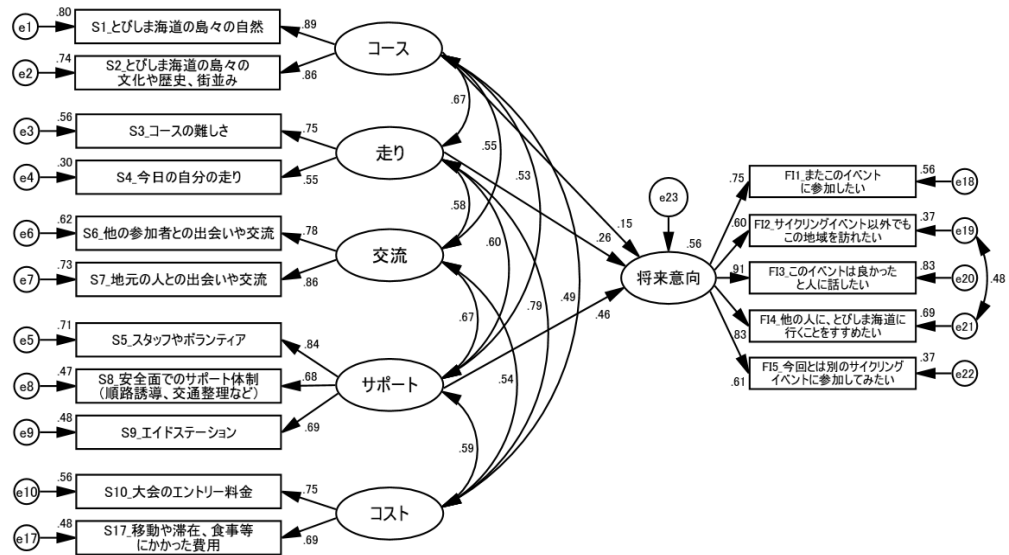


図 1 「満足」と「将来意向」のパス解析の結果

4. 考察

「参加動機」について調査した 17 項目の確認的因子分析の結果は、Alexandris et al.(2009)の研究結果を概ね裏付けるものとなった。因子間相関を見ると、「技能向上」と「自己実現」と「リスク選好」の間に高い相関が表れており、参加動機としてこの三因子間に強い相関があることを示している。

一方で、「社会的評価」因子は、他のどの因子との相関も低い。先行研究の研究対象であるリゾートスキーの持つprestige性と比較して、1 日で 110km を走破するサイクルスポーツイベントがそれほどのprestige性を内在していないという、競技特性の違いに因るものと考えられる。

「満足」についての確認的因子分析の結果から、因子間相関をみると、「走り」と「コスト」の相関が高く、支払ったコストに見合った、納得いく走りができただ、という点に満足の次元があることが示されている。「サポート」と「交流」の相関も高く、エイドステーションなどで地元のボランティアや他の参加者とのコミュニケーションが発生し自ずと交流が生まれることに起因していると考えられる。5 つの因子間に際立って低い相関はない。このことは、満足の各因子は互いに排他的に独立し合った概念ではなく、むしろ相互に影響しあっていることを示唆している。即ち、一つの因子に関わる満足度を高めれば全体的に満足度は肯定的に、逆に一つの因子に関わることで不満が生じれば全体的に満足度は否定的に転じる傾向があると考えられる。

「将来意向」の尺度構造についてのパス解析より、「好意的な口コミ」と「他者への推薦」のパスが強いことが分かった。これらはいずれも他者とのコミュニケーションを意味する行動であり、満足した顧客が広告塔となってくれている証とも言える。

「将来意向」のうち再訪意図に相当するパスを比較すると「イベント再訪意図」が「イベント以外での地域再訪意図」より強いパスを示している。その理由として、当日の天候が雨で地域再訪意図につながるとされる景観を十分に満喫する機会が少なかったことも影響していると考えられる。しかしながら「イベント以外での地域再訪意図」が相対的に低いとすれば、それ自体をイベント開催の目的とする場合には、相応の意図的な取り組みが必要となることを示唆している。

また、本イベントに参加したことによって、他のサイクリングイベントへの参加意欲向上へのパスも正の有意性を示しており、

こうした参加型イベントの開催は、サイクルスポーツ人口の増大に一定の貢献をしていると考えられる。

「参加動機」と「将来意向」のパス解析の結果からは、「参加動機」を構成する 7 つの因子のうち、「将来意向」に有意な影響を与えているのは「地域満喫」因子ただ一つであるということが分かる。これまでの先行研究の多くでは、「満足」が「参加動機」と「将来意向」を媒介していることが明らかにされていたが、今回の調査では少なくとも「参加動機」のうち「地域満喫」因子に限っては、「満足」の度合いにかかわらず、「将来意向」に対して一定の影響を持つことが分かった。

「満足」と「将来意向」のパス解析の結果からは、「満足」を構成する 5 つの因子のうち、「将来意向」に有意な影響を与えているのは「サポート」因子ただ一つであるということが分かる。残る 4 つの因子のうち、「コース」と「走り」からのパス係数は値が低く、「交流」と「コスト」からのパス係数は有意ではなかった。

5. 結論

本研究から得られた知見をまとめると以下の二点である。

(1) サイクルスポーツイベントの「参加動機」は 7 因子で構成され、「将来意向」は、「参加動機」の 7 因子のうち「地域満喫」因子に規定される。

(2) サイクルスポーツイベントの「満足」は 5 因子で構成され、「将来意向」は、「満足」の 5 因子のうち「サポート」因子に規定される。

サイクルスポーツイベントの主催者にとっての実践的な示唆としては、「地域満喫」動機を強く持つ顧客セグメントへのプロモーションを効果的に行い、イベントのオペレーションにおいては、「自己実現」「技能向上」「リスク選好」動機の発露の場としてのイベント空間を、可能な限りホスピタリティに溢れ「サポート」感を強く感じるものとして演出することで、顧客のリピータ化を有効に進めることができると考えられる。

6. 研究課題

「参加動機」「満足」「将来意向」のいずれも、イベントの属性と相関があることが先行研究で明らかになっているため、今後の研究においては様々な属性のイベントを対象とすることが必要である。